牡鹿半島 思い出広場
OMOIDEHIROBA・OSHIKAHANTOU

第20回文化財レスキュー企画展

クジラお宝珍物館

ごあいさつ

若いころは一獲千金を夢見て捕鯨船に乗り込み、南氷洋まで行ったんだ…

牡鹿半島の突端ちかくに位置する石巻市鮎川では、このような話を身近な話題として聞くことができます。明治末期から近代捕鯨の最前線基地として、戦前から戦後にかけて商業捕鯨と遠洋漁業で栄え、昭和後期はクジラ観光と養殖業を中心に生計をたててきた牡鹿半島。現在は東日本大震災からの復興の途上にあります。

東北学院大学博物館では、旧牡鹿町が蓄積してきた歴史や文化のコレクションの文化財レスキュー活動を出発点として、地域の文化的な復興にいかすことができる様々な資料を使った展示やワークショップを実施してきました。この小冊子は、文化庁の文化芸術振興費補助金「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」を受託し、「牡鹿半島・思い出広場」実行委員会（中核館：東北学院大学博物館）を主体として実施する文化財レスキュー企画展「クジラお宝珍物館」のカタログとして製作するものです。編集は東北学院大学文学部歴史学科の民俗学専攻の大学生・大学院生たちが担当しました。

近代捕鯨の拠点として栄えてきた鮎川では、捕鯨の副産物である鯨歯や鯨ヒゲを使った工芸品が製作されてきました。クジラの部位を用いて製作するものを、日本では鯨細工と呼びます。それはおもに、マッコウクジラの鯨歯で作る根付や帯留め、パイプ、判子などと、鯨ヒゲをバネとして用いたからくり細工などをいいます。これに対し、海外では鯨歯や鯨ヒゲに絵を描いたり、彫刻を施したりして飾りものや記念品としての利用がみられます。

しかし、鮎川では鯨細工のような実用品に加え、捕鯨船で旅をした経験の記念のためや他所からきた人々にクジラ文化を紹介するための飾りものや記念物も作られてきました。その両方が混在しているところに特徴があり、ここではそれを総称して「クジラ工芸」とよびます。

この図録では、まず「鮎川と日本のクジラ工芸」で鮎川のクジラ工芸について紹介します。次に「くじらトレジャー」では、捕鯨の町をアピールするために製作された飾りものや、南氷洋捕鯨のみやげものを紹介します。「昔のくらし新聞」では、鮎川小学校の3・4年生と大学生たちによる牡鹿半島での聞書きデータから、クジラにまつわるくらしのエピソードを楽しんでもらいます。最後に、「浪漫巡航」では、国立民族学博物館の所蔵資料を中心に、世界のクジラ工芸の面白さにふれていただきます。

東日本大震災の以前よりも、地域住民が地域の歴史や文化に関心を高め、復興まちづくりに活用できる資料や文化資源が増えることを、私たちの活動では“文化における「より良い復興（Build Back Better）」”と呼んできました。本展示とこの小冊子がその一助となればと願っています。

東北学院大学　文学部歴史学科教授　加藤　幸治

凡　例

- この冊子は、平成30年度文化芸術振興費補助金「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」により、「牡鹿半島・思い出広場」実行委員会が発行した。
- 展示の内容は、第20回文化財レスキュー企画展「クジラお宝珍物館　―クジラ工芸と鮎川の近代―」（主催：「牡鹿半島・思い出広場」実行委員会・東北学院大学博物館・石巻市教育委員会）で展示した資料をもとにした解説書である。開催期間等は以下の通りである。
  石巻市指定文化財旧観慶丸商店　平成30年10月31日（水）～11月12日（月）
  東北学院大学博物館　平成30年11月17日（土）～12月6日（木）
- 本書は、加藤幸治（東北学院大学文学部歴史学科教授）監修のもと、佐藤麻南（東北学院大学大学院文学研究科アジア文化史専攻）と以下の同歴史学科3年生民俗学実習履修学生が執筆・編集を行った。
  小笠原涼・金美乃里・菅原美咲・畠山稜平・矢葺隼也・上野果菜・佐藤達哉・佐藤千夏・須佐佳奈子・渡邊愛*・菊谷誠人・小池和香*・佐藤遼太郎・鈴木理沙・中嶋瑞希・八木橋克顕（*はデザイン総括）
- 本書掲載の所蔵情報等については、その都度記した。とくに記載のないものは、東北学院大学加藤幸治研究室所蔵である。

鮎川と日本のクジラ工芸

捕鯨会社奉納の扁額絵馬

宮城県東部に位置する牡鹿半島・鮎川浜。明治の終わり頃、鮎川浜に近代捕鯨が持ち込まれ、東洋漁業株式会社が参入しました。これをきっかけに次々と捕鯨会社が鮎川浜に事業所を設置しました。たくさんの捕鯨会社の事業所がひしめき合っていた鮎川浜では、競い合うように神社に扁額絵馬が奉納されたり、記念碑が建てられたりしました。金華山沖の漁場に恵まれ、昭和63年(1988)に商業捕鯨全面禁止が採択されるまでクジラの町として栄えてきました。

捕鯨全盛期の鮎川の風景(撮影：鹿井清介)

昭和20～40年代にかけて捕鯨の最盛期が訪れます。鮎川浜には日本全国から仕事を求めて人々が集まりました。捕鯨船の乗組員、砲手、解剖員など捕鯨にたずさわる人々や、鯨肥作りやクジラの加工品作りなどクジラの副産物の加工にたずさわる人々で町はにぎわい、当時は鮎川に映画館や飲食店が立ち並んでいました。

クジラの副産物のひとつである鯨歯。主にマッコウクジラの歯を使った工芸品が作られるようになります。鯨歯工芸は鮎川浜の定番のおみやげとなっていきます。鮎川浜には鯨歯工芸品店が4店舗ありました。鯨歯工芸は鯨歯工芸職人だけでなく、南氷洋捕鯨に行っていた捕鯨船の乗組員が長い航海のなかで鯨歯に細工をしたり、加工したりすることもありました。こうした南氷洋捕鯨のおみやげを今なお大事に保管している人たちもたくさんいます。

千々松正行さんに聞きました!

鯨歯が印材になるまで

かつて鮎川には、鯨歯工芸品店が4店舗ありました。さらに、おみやげ屋さんでも鯨歯工芸品は売られ、鮎川のおみやげの定番でした。現在も、昭和初期から3代にわたり鮎川で鯨歯工芸店を営んでいる千々松商店。千々松商店3代目店主・千々松正行さん。もともと、千々松商店は佐賀県唐津市で工芸品店を営んでいましたが、捕鯨が盛んな鮎川浜へ工芸品の材料を求め、移住してきたのです。そこから鯨歯工芸店として千々松商店は始まりました。

千々松商店では鯨歯の印鑑を主力商品として扱っています。ここでは鯨歯から印材になるまでを紹介します。

千々松商店では鯨歯の印材は、基本的に1本の鯨歯から1つしか作りません。それは鯨歯の芯の部分を使うためです。芯の部分を外し、1本の鯨歯から2本の印材を作ることも可能ですが、芯の部分を入れることでより欠けにくく、丈夫な印材になるのだそうです。

1 材料を選ぶ

ここでポイントとなるのが、鯨歯の中身が詰まっているか、“虫歯”はないか、この2点です。鯨歯のなかでも印材に使えるものと使えないものがあるそうです。まずはきちんと中身が詰まっていること、これが大事になります。大きいものでも中身が空っぽ(“ガラッパ”と呼びます)のものは印材の材料としては不向きです。

そして厄介なのが2つ目の“虫歯”。クジラも虫歯になるとは驚きです。さらに、クジラの虫歯は表面から見ることができないため厄介なのです。大きくて中身もしっかり詰まっている鯨歯でも切ってみたら“虫歯”だったということがよくあるそうです。

2 不要な部分を落とす

材料が決まったら、不要な部分を落とします。これはある程度、職人の勘で一発で落とすそうです。鯨歯を万力（まんりき）という道具で固定し、のこぎり・丸のこを使います。

ここで大事なのが、“虫歯”がないか確認すること。実はクジラの“虫歯”は表面からは見えないことがほとんどなのだそうです。“虫歯”の部分は周りの部分に比べ、もろく欠けやすいのです。そのため“虫歯”があるものはできるだけ使いません。10本鯨歯があったら7～8本は“虫歯”があるというから驚きです。

3 形を整える

不要な部分を落とした材料を円筒形に整えていきます。サンダーで荒削りをし、目の粗い紙やすりで削っていきます。ここまでの工程に一番時間がかかるそうです。

4 切り口を円形に整える

全体が円筒形に近づいてきたら、切り口（字を彫る部分）を円形に整えていきます。ここでは旋盤を使います。

5 仕上げ

形が整ったら、仕上げの工程に入ります。1000～1200番の目の細かいやすりを使い磨いていきます。ひびが入らないよう、水をつけながら慎重に行います。

このとき、左手の使い方が重要なポイントです。左手で印材を回しながら、バランス良くやすりをかけていかなければなりません。つやが出てきたら、固形のワックスを用いてグラインダーでつや出しをして完成です。

くじらトレジャー

牡鹿半島には明治末期から捕鯨会社が複数進出し、戦前に全国から多くの若者が仕事を求めてやってきました。当時の鮎川は、“クジラの町”として賑わいをみせていました。戦後、さらに捕鯨は盛んになり、捕鯨会社の仕事等、多くの若者が南氷洋での捕鯨に出向きました。

捕鯨の町をアピールするために作られた宝もの、南氷洋捕鯨から帰国した人々が持ち帰った珍しいみやげもの、そうした珍物を「くじらトレジャー」として紹介しましょう。

鯨歯のパイプ
（カクトコレクション）

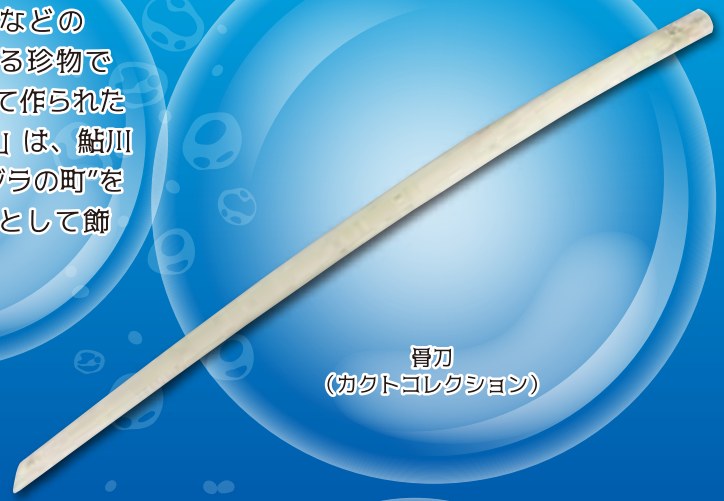
鯨歯の麻雀牌

鯨ヒゲの菓子皿と匙

鯨歯のブローチ
（カクトコレクション）

“クジラの町”のアピール

鮎川では、鯨歯や鯨骨、鯨ヒゲなどの部位は、身近にある珍物でした。これらを使って作られた「くじらトレジャー」は、鮎川を訪れる人々に“クジラの町”をアピールするものとして飾られてきました。



骨刀
（カクトコレクション）

マッコウクジラの歯の彫刻
（カクトコレクション）

マッコウクジラの歯の彫刻
（カクトコレクション）

鯨歯のペンギン
（所蔵：石巻市立鮎川小学校）

クジラの背骨

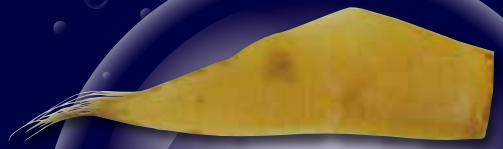
クジラの耳の骨
（カクトコレクション）

セミクジラのヒゲ
（カクトコレクション）

ニタリクジラのヒゲ
（カクトコレクション）

ミンククジラのヒゲの飾りもの
（カクトコレクション）

ミンククジラのヒゲ
（カクトコレクション）



ナガスクジラのヒゲ（カクトコレクション）

ナガスクジラのヒゲ（カクトコレクション）

ナガスクジラのヒゲは
口の先端ほど色が
薄くなります

シロナガスクジラのヒゲ
（カクトコレクション）

南氷洋のみやげもの

戦前から戦後にかけて、牡鹿半島の若者や捕鯨関係の人々が南氷洋捕鯨船団に乗り組み、南氷洋での捕鯨に従事しました。戦前は、各国が競ってクジラを捕獲するオリンピック方式と呼ばれる時代でした。戦後、より多くの人々が南氷洋での捕鯨に参加するようになると、寄港地などで入手したみやげものが、捕鯨船での武勇を誇る記念物として、それぞれの家に残されました。

ペンギンの剥製
（所蔵：鹿井清介）

サンゴ
（カクトコレクション）

南太平洋の貝殻
（所蔵：石巻市教育委員会）

鯨ヒゲで作った帆船模型
（所蔵：鹿井清介）

南太平洋の珍しい貝殻や鳥の剥製、サンゴなどはみやげものの定番として持ち帰られました。また、南極のペンギンを冷凍して持ち帰って剥製にしたものや、南極への往復の数ヶ月間の暇な時間を持て余して、製作された鯨歯や鯨ヒゲの飾りものなどもあります。

極楽鳥の剥製

震災時、ボランティアの方が貴重なものとして保管していました。

くじらミュージアム

東日本大震災で被災した「おしかホエールランド」は、クジラの生態や生きものとしての特徴、クジラ文化などを紹介する施設でした。商業捕鯨禁止のあと、クジラは観光資源としての側面が強くなりました。「おしかホエールランド」の前身は、昭和29年開館の「牡鹿町立鯨博物館」で、開館にあたっては資料を持ち寄って作り上げた手作りの博物館でした。鯨類の模型も、地元の大工の鹿井清介さんが手作りしたもので、その前身は戦前に作られた「鯨館」という施設です。“クジラの町”をアピールするために作られた歴代のクジラのミュージアムは、「くじらトレジャー」でいっぱいでした。

旧牡鹿町立鯨博物館の絵葉書
（提供：鮎川の風景を思う会）

旧牡鹿町立鯨博物館の絵葉書
（提供：鮎川の風景を思う会）

町立鯨博物館のために製作されたクジラの模型
（製作：鹿井清介）

くじらトレジャーの広がり

鮎川に限らず全国の“クジラの町”では、クジラの部位を使った工芸品やクジラをかたどった郷土玩具などが製作されてきました。鯨歯や鯨ヒゲを用いた道具には、菓子皿や楊枝、靴ベラ、麻雀牌、ステッキ、パイプなどがあり、鮎川でも鯨歯工芸店が「パイプ屋さん」と呼ばれるほどよく売れました。クジラの郷土玩具には、和歌山県太地（たいじ）や那智勝浦（なちかつうら）、長崎県、高知県等で作られている鯨船、鯨車がありました。昭和後期の国内旅行ブーム時には、かわいらしいクジラの張子や土人形、勇壮な古式捕鯨のおもかげを伝える勢子船などが好まれました。

▼郷土玩具　鯨車（和歌山県）

▲郷土玩具　鯨車（長崎県）

郷土玩具　鯨船（和歌山県）

昔のくらし新聞

食べ物で遊ぶ!!

むね子さんに昔の遊びについて聞きました。昔の遊びは、お手玉や、ゴムとびなどがありました。お手玉には、あずきが入っていたそうで、今より少し重かったそうです。ゴムとびは、タイヤチューブで作っていたようです。今は、ゲーム機で遊ぶことが多いと思いました。タイヤを切って道具を作るのがおどろきました。

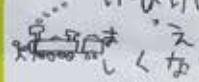
もちでいとをまいます!

ぎんいちろうさんに昔の遊びと道具についてのお話を聞きました。ぎんいちろうさんはなわとびとじんとりをして遊んだそうです。その時は友達と仲よく遊んだそうです。また、使っていた道具で、うすのことを、聞きました。うすで餅のお肉を、ついてやわらかくして食べたそうです。うすは、もちをつくだけでなくて、あかりとしてもくらしました。

よーいどんとたてをまわす!

ぼくはかずこさんに「おこぎねについてお話を聞きました。おこぎねはもちつきに使うことが多いそうです。農家の男の人が使うことが多いそうです。よこぎねのほうがたたてぎねがあるそうです。ぼくはお話を聞いてたてぎねはどんな時に使うのかふしぎに思いました。ぼくはたてぎねはあまりみないなぁーと思いました。

中学生のに…



まちの工場などで働くことをよぎなくされていました。かずおさんは、小牛田の機関区でじょうきの明車の整びを、する業をしていたそうです。ぼくは中学生で働くなんてありえないと思ってびっくりしてしまいました。

かずおさんに、お話を聞きました。約七〇年前の日本は、戦争をしていました。小学校を卒業したらすぐ工場で働くことをよぎなくされていました。かずおさんは、小牛田の機関区でじょうきの明車の整びを、する業をしていたそうです。ぼくは中学生で働くなんてありえないと思ってびっくりしてしまいました。

クジラをもとめて南へ!!

はるおさんにクジラを捕りに行った事についてのお話を聞きました。はるおさんは、ほげい船とよばれるクジラを捕る船にのって鮎川から出航しました。燃料を入れるためにフィリピンによって南きょくに行ったそうです。ほげい船でオーストラリアにいる鯨や南きょく(パレニー諸島)にいる鯨を大砲でうって、ほげい船の地下にあるまどから鯨をかくにんして鯨を捕っていたそうです。一度南きょくに向かうと半年は船のなかですごしていたそうです。大砲でうって鯨を捕っていた事が初めて知りました。

鮎川小学校
3・4年生
木村海尋・大澤侑生
沼倉陽大・石森咲妃
松村海音・亀谷諷琉
名和銀時

昔のくらし新聞 鯨報

捕鯨船の一味

新山(にいやま)出身で、元捕鯨船乗組員のハルオさん(九〇代男性)にお話を聞きました。

「昔の鮎川では捕鯨が盛んだったんだけど、そこで私は捕鯨船の乗組員をしていたんだ。南極まで大きな船で行って鯨を捕っていたんだよ。日本を出港してからシンガポール、シドニーを経由して、さらに南下して南極に向かって行ったんだ。毎年十月に日本を出発して、半年間鯨漁をしてから翌年の四月頃に帰って来ていたんだよ。だから家にはあまり長く居られなかったんだ。経由した国の周りの海では捕れる鯨の種類が異なっていたんだ。特にマッコウクジラとかツチクジラのような歯鯨からは歯も取っていたんだけど、パイプや印鑑を作って売る業者もいたんだよ。こういう鯨歯の加工は今でもやっているよね。」

大洋漁業の解剖場(撮影:鹿井清介)

解剖長は目利きさん!

鮎川出身のタイジさん(八〇代男性)にお話を聞きました。

「俺は大洋漁業で鯨の解剖をしていたんだけど、俺のように肉の善し悪しを判別できる人は少なかったんだよ。鯨の解剖はまず肉と皮に分ける。この時使うのは小包丁で、肉を切るのは大包丁を使うんだ。鯨はワイヤーで吊り上げて、解剖には五・六人必要だったね。鯨の捨てるところといえば肺くらいで、その他は全て売り物になったもんだ、全国に需要があったんだよ。」

捕鯨と苦悩の数々

十八成(くぐなり)出身で、鯨の解剖をしていたカズシゲさん(八〇代男性)にお話を聞きました。

「戦時中私は小学校で学徒し、明電舎というところで終戦まで働いていたんだ。終戦後は捕鯨会社「大洋漁業」に入社して、鯨肉の切り分けの仕事をしていたよ。鯨の解剖は一頭を六・七人でやるから、大型のシロナガスは二時間、ナガスは一時間で解剖できるんだよ。二m程度の大包丁で解剖していたし、十二時間労働と十二時間休憩の交代制だったからすごく疲れたよ。「大洋」は大型の鯨だけを狙っていたから特にね。」

海のコックさんは重労働!

十八成(くぐなり)出身で、捕鯨船の乗組員だったシンイチさん(八〇代男性)にお話を聞きました。

「「極洋」に勤めていて、南氷洋へ鯨を捕りに行っていたんだ。俺は鯨肉を包丁で背と腹に分ける担当だったよ。捕鯨の仕事は力自慢の人が向いている仕事でね、俺は三〇歳くらいの時に、母船のコックに転職したんだ。母船っていうのはね、南氷洋捕鯨での母船で、解体した鯨肉などを加工する工場が入っていた程大きい船だよ。その分乗組員も多く、コックは十人くらいいたかな。そもそも捕鯨では船の上で半年以上過ごすんだ。だから鮎川にはほとんど戻らなかったな。燃料とかの関係でほとんどを横浜で過ごしたよ。」

ほっぺた落ちる鯨肉弁当

北海道釧路出身のタマエさん(八〇代女性)にお話を聞きました。

「私が鮎川に来たときはまだ鯨を捕っていたから、マッコウクジラをバケツにもらうことがあったの。そのもらった鯨を骨とかも一緒に圧力鍋で砂糖やみりんで味付けして煮て娘の弁当にいれたの。そしたら学校の先生や友達が食べたいって言っていたみたいで、次の日にみんなで食べられるように沢山持って行かせたのよ。」

昔のくらし新聞 幸報

懐かしいサンマの匂い

給分出身で、サンマの加工をしていたフミヨさん（八〇代女性）にお話を聞きました。

「二〇歳を過ぎた頃は鮎川に住んでいてね、家の近くのサンマの加工屋に手伝いに行っていたの。そこではサンマを加工して肥料にしていたのだけど、私はその中でも肥料を乾燥させる仕事を担当していて、海岸のコンクリートの上に肥料にしたサンマを干していたのよね。コンクリートの上に乗せていたから臭いもしていたんだけど、慣れていく内にだんだん気にならなくなっていったわ。仕事を始めた頃は慣れていなかったから、臭いなぁと思っていたのだけど、今ではあの匂いがとても懐かしく感じるのよ。こういった魚から作った肥料は私たちの世代よりも昔から使われていたんだけど、それは今でも使われているし、鶏のエサになったり魚の養殖のエサとしても使われるようになったりしているよね。」

出稼ぎ？タテアミ？in鮎川

給分出身のエイコさん（九〇代女性）にお話を聞きました。

「鮎川といえばそうね…私が小学生の頃、鮎川から女性がよく鯨の切り身を売りに給分まで来ていたねえ。みんな小遣い稼ぎに来ていたのよ。姉は女性団の一員でね、給分から鮎川まで女性五・六人で働きに出ていたのよ。給分は漁業が盛んでね。幼い頃は親の手伝いをよくしたもんだ。私が手伝っていたのは「タテアミ」だよ。タテアミっていうのは定置網で、袋のようになっている部分に魚を追い込むのを任されていたのよ。」

とある女性の半生

鮎川出身で、元調理師のキヌコさん（八〇代女性）にお話を聞きました。

「父と弟は捕鯨船で働いていて、弟は鯨まつりの水中花火を落とす役割もしていたの。花火を船で落としていくのは操縦技術が必要で、ミスをすると船が巻き込まれる危険性もあったから、それをこなしていた弟は本当にすごかったのよ。私は金華山が見える「ホテルニューさかい」で調理の仕事をしていたの。金華山の連絡船でも調理師をやっていたから、今も老人ホームで出される食事に口出ししたくなっちゃうのよね。二〇歳の頃に福島県出身の旦那さんと結婚して、病院を開くために横浜に移ったの。医者の旦那さんは堅物で面白味のない人だったわ。やっぱり愛嬌は大切よね。旦那さんが亡くなった後は鮎川の老人ホーム「清心苑」に入って、野菜の育て方や編み物などを周りの皆に教えることで喜んでもらってるわ。とっても楽しいし、喜んでもらえるとやっぱり嬉しいわね。」

一服、のまいん

志田郡下伊場野村出身のセツコさん（九〇代女性）にお話を聞きました

「昔の鯨まつりは、皆でごだごだって歌をうたったりしたの。私はそのお祭りで、皆で仮装して町を歩く仮装行列に一回だけ参加したことがあって、そこで踊ったのが一番楽しかったわ。他にも鯨を配る時に、休憩していきなよっていう意味で「一服、のまいん」って言って配ったりしたの。」

水中スターマインと捕鯨船（撮影：鹿井清介）

忘れられない花火

鮎川出身で、畑や漁の手伝いをしていたカズコさん（九〇代女性）にお話を聞きました。

「私は若いとき石巻にいたの。鮎川に来てから婦人会に入ってね、鯨まつりでは浴衣を着て仮装パレードに参加したのよ。最後に打ち上げられる花火も大きくて綺麗だったわ。他に明かりもないから、真っ暗な中見える大きな花火はすごく綺麗で感動したものよ。忘れられないわ。」

昔のくらし新聞 恵報

海苔でノリノリ

鮫浦出身で農家のトモコさん（九〇代女性）にお話を聞きました。

「夏は畑をやっていたんだけど、冬はそれが出来なくてね、内職で海苔を作っていたんだよ。海苔は基本的にすごく大きい機械で作っていたよ。作った海苔のほとんどは売っていたんだよね。売る時に良い出来の海苔だと、当時十円以上で売れたんだよ。色が悪かったり、ザラザラしているものだと安くてね、八円くらいだったかなあ。余った海苔はご近所にお裾分けしてたんだ。あとは機械にかけなかった生ノリは、私達家族が食べる用に海苔の佃煮にしたんだよ。」

海のめぐみ

渡波出身で、八百屋を営んでいたタカシさん（八〇代男性）にお話を聞きました。

「昔の石巻では趣味で小さい船を持っている人も沢山いて、私も船で魚を捕まえに行ったもんだよ。万石浦は潮がひいた時にアサリやカキが採れるから、多くの人が集まって来ていたよ。岩ノリや松藻（まつも）も採れたし、採ったカキで釣りをしたこともあったなあ。最近は規制が厳しくなって自由に採れなくなってしまって残念だよ。」

牡鹿鯨まつりパレードでのトニー谷の仮装（撮影：鹿井清介）

狙え！一攫千金

泊（とまり）出身で、漁師だったフズイさん（九〇代女性）にお話を聞きました。

「私は若いときに漁師をしていてね。小型船に乗っておっきいホタテやワカメ、アワビやノリを採って昔は生活していたんだよ。今と昔じゃ、お金の価値は全然違っていて、昔の方が今よりも儲かっていたのよ。漁は泊、寄磯、前網に行って、一本狙った獲物しか捕ることはなかったわ。親戚の手伝いをしに行くこともあったのよ。」

巨大そろばん両手で担いで

鮎川出身で、民宿を営んでいたノブコさん（九〇代女性）にお話を聞きました。

「若い頃、鯨まつりの仮装行列に参加していたのよ。私は当時人気だった「トニー谷」というお笑い芸人の仮装をしたの。大きなメガネに口ひげをつけて、髪はオールバックにして草鞋を履いたの。一番の特徴の大きいそろばんは、娘がそろばん教室をやっていたからそこから借りて、ギターのように玉を弾いて鮎川を練り歩いたのよ。」

我流ハモ捕り術

小渕出身で、漁師のカズオさん（九〇代男性）にお話を聞きました。

「昔、小漁師をしていたときにハモを捕るために「筒（どう）」っていう筒状の道具にエサを入れて、中に入ってきたハモを捕っていたんだ。ここで言ってるハモっていうのは、アナゴのことね。筒は昔、竹で作っていたんだ。筒の入口と底が開くようになっているんだけど、私は入口の方だけを開けて捕ったハモを筒から出していたよ。私が戦争に行っている間、父親は「北洋トロール」っていう二〇〇～三〇〇トンの遠洋漁業船に乗ってハモを捕りに行っていたりしたようだよ。」

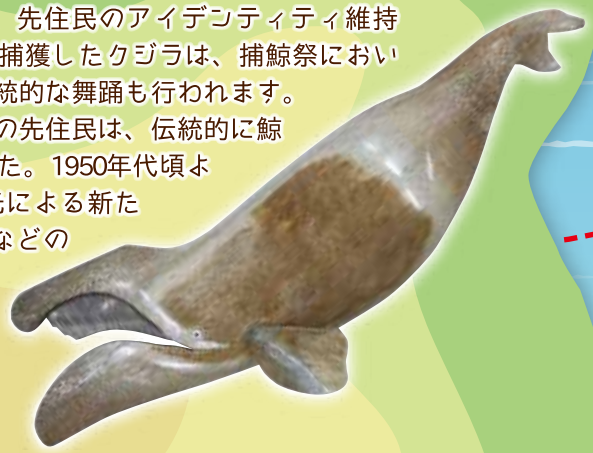
浪漫巡航

世界のクジラ工芸に目を転じてみると、鯨歯や鯨ヒゲ、鯨骨がさまざまなかたちで使われてきたことが分かります。儀礼に用いられる道具は、クジラの体の大きさや雄大に泳ぐ姿から、クジラの部位が神や精霊を宿したりそれらと通じたりする能力を持つと期待されたことのあらわれです。また、記念品的なものは、鯨油を求めて欧米各国が捕鯨を行うようになり、長い船旅をするようになって、航海の記念として珍重されたことからみやげものとして発展してきました。

どうしてクジラを彫るのかな？

アラスカ先住民のひとつであるイヌピアットの人々は、伝統的に捕鯨を行い、現在でもホッキョククジラ猟を行っています。イヌピアットの捕鯨は、先住民生存捕鯨といわれる、先住民のアイデンティティ維持と文化継承に必要な生業としての捕鯨です。捕獲したクジラは、捕鯨祭において村全体での共食や分配のために供され、伝統的な舞踊も行われます。北極圏に生きるイヌイットやエスキモーなどの先住民は、伝統的に鯨類や海獣の骨を用いて道具を製作してきました。1950年代頃より、彼らは自らの伝統の表現としてまた観光による新たな収入源として、石製彫刻品や版画・絵画などの製作に従事してきました。

この資料は、アラスカ州北部の北極海沿岸地域に居住する先住民族イヌピアットの作家による「水面に躍り出た鯨」という作品です。石で彼らの行う捕鯨を象徴するホッキョククジラを彫刻し、口の中には本物の鯨ヒゲで細部まで表現しています。



「水面に躍り出た鯨」<エスキモーの彫刻>
（所蔵：国立民族学博物館）

首の関節大丈夫？ ちょっと不気味な平たい棍棒（こんぼう）

ニュージーランドのポリネシア系先住民であるマオリの人々は、戦闘に用いる武器のひとつにパツやメレ、ワハイカと呼ぶ棍棒を用いました。南太平洋の人々は飛び道具を卑怯と考え、武勇を誇る接近戦で戦争を行ってきたのです。棍棒の材料は木や軟玉（なんぎょく）、鯨骨などが用いられ、とくに鯨骨は加工しやすく固い材料として、古くから用いられてきました。このワハイカの柄の上には、力を誇示して舌を出しているティキ（神話に登場する地上最初の人間）が彫刻されています。

この資料は、ニュージーランドのオークランド博物館の収蔵品の精巧なレプリカです。

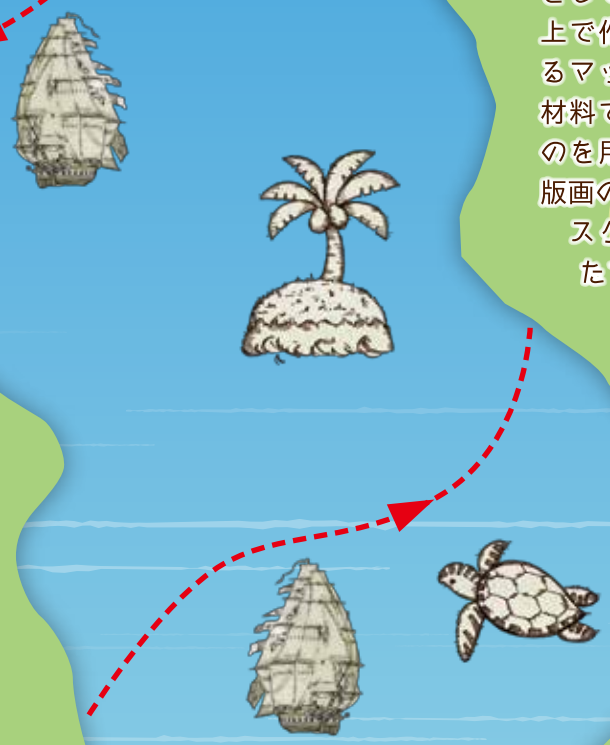
ワハイカ<棍棒>
（所蔵：国立民族学博物館）

これがないと結婚できない!?

南太平洋の島々のうちメラネシアに含まれるフィジー共和国では、集団同士のつながりを作ったり強化したりするために、宝物を贈与・交換する伝統があります。タプアと呼ばれるマッコウクジラの大きな歯の首飾りもそのひとつです。タプアが贈られるもっとも重要な目的は、結婚の申し込みです。男性は、代理人を立てて好きな女性の父親に結婚の申し出を行い、了承されるとタプアを女性の家に贈ります。これは大きければ大きいほど良いとされ、さらに燻(いぶ)して磨くことであめ色に輝く財として喜ばれます。タプアは、葬式や集団間のいさかいの調停などにも用いられ、この地域の社会の安定には無くてはならないものだったのです。

このタプアは、19世紀後半に南太平洋の島々でキリスト教の伝道にたずさわった宣教師ジョージ・ブラウンがフィジー諸島で収集したものです。

タプア<宝物>
(所蔵：国立民族学博物館)



何が描かれているのかな?

燃料や潤滑油に石油が用いられるようになる以前は鯨油が用いられていました。スクリムショーは、アメリカの捕鯨船の乗組員たちが船での長旅の癒しとして、また恋人や家族へのみやげものとして、船上で作成した鯨歯彫刻です。鯨油は大型の歯鯨であるマッコウクジラから採取するので、鯨歯は身近な材料でした。鯨歯や鯨骨を磨き、釘などの鋭利なものを用いて先刻し、染料を付けて拭き上げると、銅版画のような細密画を描くことができます。

スクリムショーは、鯨油のための捕鯨を行っていた19世紀のものであり、現在は100年以上前のスクリムショーを模していわばレプリカとして製作されています。

スクリムショー　鯨歯

スクリムショー　鯨骨(カクトコレクション)

鯨骨ゲート

近代に捕鯨基地となった地域には、クジラの骨で作った門などが作られてきました。ここではそれを「鯨骨ゲート」と名付けて紹介してみましょう。

～鮎川編～

鮎川に最初に鯨骨ゲートが作られたのは、明治39年にこの地にはじめて捕鯨の前線基地を作った東洋漁業株式会社の敷地内だった。マッコウクジラの脳油の精製工場の入口に設置された鯨骨ゲートには、肩甲骨に社印の「一〇（イチマル）」が浮き彫りされていた。

その後、鮎川は昭和8年の昭和三陸津波に見舞われた。その震災からの復興のために現在の鮎川集会所の位置に建設されたのが「震嘯災記念館」と津波記念碑です。その後、そこは「鯨館」という展示施設となり、その後継施設が「町立鯨資料館」であり、「おしかホエールランド」であった。「鯨館」の入口には鯨骨ゲートが作られ、鮎川の年配の方はこれをよく覚えておられる。

2代目!

昭和初期に撮影された鮎川の鯨骨ゲート

明治末期に撮影された鮎川の鯨骨ゲート
(Image #27363 American Museum of Natural History Library)

もとは
ロイ・チャップマン・
アンドリュースが撮った
これが1代目!

～全国編～

和歌山

紀伊半島・太地の恵比須神社の鯨骨鳥居

和歌山県太地町の恵比須神社のセミクジラの鯨骨鳥居。井原西鶴の『日本永代蔵』に「鯨恵比寿の宮をいはひ、鳥居にその魚の胴骨立ちしに、高さ三丈ばかりも有りぬべし」とあるものを再現したもの。戦後も、マゴンドウを中心に沿岸捕鯨の港となっている。

五島列島

五島列島・福江島の鯨骨ゲート

西海捕鯨の大洋漁業の基地であった五島列島・福江島荒川のナガスクジラの鯨骨ゲート。福江島には、富江に日水、小浦に極洋、布浦に日東が基地を持っていた。五島沖も、三陸沖と同様にクジラのホットスポット！

大阪

大阪市・瑞光寺の雪鯨橋と鯨骨ゲート

大阪市東淀川区・瑞光寺の鯨骨ゲートと鯨骨橋「雪鯨橋」。18世紀の半ばに、諸国行脚していたこの寺の住職が、太地に立ち寄って豊漁祈願をした。その結果見事にクジラがとれたことから、鯨骨を寄進し作られた。

おすすめ

平成30年度文化芸術振興費補助金
「地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業」

クジラお宝珍物館

監　修：加藤幸治
編　集：佐藤麻南・渡邊愛・小池和香
発　行：「牡鹿半島・思い出広場」実行委員会
発行日：平成30年10月31日